

◇ 巻頭言

平成 19 年の年頭にあたり一言ご挨拶申し上げます。

今年の 10 月には I A H A I O（人と動物の関係についての国際会議）第 11 回大会が、アジアの地としては初めて、東京で開かれるなど、いろいろなイベントが盛りだくさんに企画されているようで、忙しくワクワクするような一年となりそうです。今年も皆様お一人お一人にとって明るく充実した日々が積み重なりますことを、心より祈念いたしております。

このごろ、いろいろな折に触れ良く思うことを一つだけご紹介します。

最近、農林水産省が音頭をとり畜産技術協会というところが世話役を引き受けて、家畜を対象としたアニマルウェルフェアの勉強会というのが定期的に開かれ、そのメンバーの一人として参加しています。生産者の代表、お役人、学識経験者、ジャーナリストなど様々な背景をもつ人たちが集まって意見交換をしています。アニマルウェルフェアは動物福祉と訳されることが多いようですが、僕自身はあまりピンと来ないので、勝手に”動物が心身ともに健康な状態”という意味で受け止めています。

これまで獣医学は動物の身体的な健康を守る上で大きな進展を遂げ、その社会的使命を果たしてきました。しかし”心身”のうちの”心”の方に向けられてきた関心は必ずしも十分ではありませんでした。これからの獣医学は動物のメンタルケアあるいはサイコロジカルヘルスといった分野にもっともっと目を向けていく必要があると思います。そしてその役割をまっさきに担っていくのが、行動学に関心を持ち、知識を深め技量を磨こうと意気軒昂な皆様だと思えます。

獣医療は小児医療によく似ていると思います。われわれ大人は一人寂しく入院を余儀なくされてつらい治療を受けることになっても、病気や怪我を治すためと納得して我慢できます。でもそんな難しいことを理解しようがない幼児にとっては、入院は大きなストレス以外の何物でもありません。動物達にとっても同じ状態。不安や恐怖にさいなまれては、免疫機能をはじめ本来の抵抗力も発揮できず、治療効果も低下してしまいます。

動物達の心のケアをどのように具体化するか。これが私達に求められている大きな課題の一つだと思います。そのためには神経科学をはじめとする基礎的な研究と臨床の現場をより密接に結びつけるような枠組みが必要になるだろうと考えています。

また今年もいろいろな機会をとらえて皆様と議論していけることを楽しみにしております。

暖冬とも言われていますが、時期的には寒さが本格化する季節です。皆様どうぞお元気にご活躍ください。

会長 森 裕司

重要！！！！＜研究集会のお知らせ＞注目！！！！

News letter Vol.1でお知らせしたとおり、昨年のコアメンバー会議にて、獣医行動学研究会では独自の研究集会（研究会会員を対象にしたもの）を今後、日本獣医師会年次大会開催時に開くことを決定しました。内科学アカデミーではこれまでどおり、会員外獣医師、動物看護師や病院職員など幅広い対象者をターゲットに行動学・行動治療学の啓発をしていきます。

早速ですが（遅すぎるご連絡で申し訳ありません）、以下の要領で開催しますので御案内いたします。奮ってご参加ください。会場が小さいため、事前の参加申し込みが必要です（aytake@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp 東大 武内）。

時 2007年2月23日 9時30分～11時30分
会場 大宮ソニックシティー 小会議室 803
会費 会場費として500円
テーマ 「行動療法の手技についての理解を深めよう！」
学習理論の復習～シーザーミランの教え方をどうとらえるか？～
参加 研究会会員限定。先着30名。

＜図書・論文の紹介＞

「動物感覚」 テンプル・グランディン、キャサリン・ジョンソン著
中尾ゆかり訳、菊水健史監修 NHK出版

人は自分の知覚をすべての基準として適応しがちである。これはもっともなことで、自分の見聞き、感ずることが他の人と違うということを認めてしまうことは、自らが外界からの感覚によって経験・学習してきた“自己”の根本的価値基準が揺らぐからである。他人はもしかしたら自分とちがう世界に生きているのかもしれないと漠然と感ずることはあるものの、他の人が本当にどう感ずているか、どのような経験と学習を積み重ねてきたのか、というものを深く考え、そして広く受け入れていくことは、思想的には正しいと思えても自分の生活スタイルの中で実行することは難しいものであろう。

本書“動物感覚 (Animal in Translation)”は高機能自閉症とされるアスペルガー症候群のテンプル・グランディンと、自らが自閉症の母親でもあり精神医学の著述家であるキャサリン・ジョンソンとの共著で、動物から見た世界観を述べたものである。昨年アメリカで出版されて以来、12週にわたってニューヨークタイムズベストセラーに選ばれるほどの人気を得た。グランディンの言葉を借りると“私は自閉症であり、動物の感覚でものを見ることができる。そのため動物の「認知」「思考回路」「行動」が普通の人よりもよく理解できる”として動物の住む世界を解説したものである。テンプル・グランディンは1947年生まれ、6歳の時に自閉症と診断される。当時はまだアスペルガー症候群との

診断はほとんど皆無の時代であった。その後、1989年にイリノイ大学にて動物科学分野の博士号を取得し、現在はコロラド州立大学の動物応用学科で教鞭をとる准教授であり、世界でも著名な応用動物学者である。

彼女の有名な発明に締め付け機 (squeeze machine) といものがある。自分自身が感情や不安を抑えられなくなった時にこの機械にはいつて、身体を圧縮することで冷静さと安心を得られるというもの。その発明にいたる経緯などが本書に詳しく記載されている。さすが研究者であるがゆえ、その効果に関しては、脳がどのように応答しているのかが想定されている。その他にもなぜ牛が屠場や新しい牛舎で不安行動を示すのか、鶏の選択的交配による弊害の理由、攻撃的な犬をおとなしくしつける方法やその神経科学的背景などが、非常にわかりやすく記載されている。その他、動物の恋愛、コミュニケーション能力などが解説されており、専門家のみならず一般の人でも動物の行動や情動反応のメカニズムの理解に役立つものであろう。

それなら彼女は普通の動物行動研究者と同じなのだろうか。だが彼女の場合、アスペルガー症候群という障害が逆に動物の心を理解する手助けになったという。一般の人たちは動物の行動や情動の移り変わりを、言語を利用して、さらに理論的構築によって理解しようとする。しかし言語を持たない動物がそのような言語を中心とした脳機能で世界をみているわけがない。アスペルガー症候群の人たちに特異的な映像としての情報処理能力の高さ、さらにはその映像上の隅々までを見届ける並外れた能力が、動物が外界を見るときの情報処理の仕方と類似しており、彼女の動物に対する理解を特殊なものとしたという。確かに言語をもたない動物の情報処理がヒトのそれと同じとは考えることはできないであろう。動物から見た世界は、その動物の知覚能力と情報処理能力によるはずである。そのような動物種による違いがあることも重要であるが、同じ生物、特に哺乳類として進化してきた過程で保存されている共通の神経機構があることも、実は動物の行動を理解する重要なポイントである。本書でもそれら2つの視点からの解説が行われており、著者の明晰さが伺える。

本書を読み終えて、ふと養老孟司氏の“ばかの壁”を思い出した。人と人の相互理解や価値観の違いの溝を生めることですら、人間社会は四苦八苦している。動物に対しては“犬だから”とか“馬だから”といつて多少の違いを受け入れてはいるものの、本来の犬の感覚や情報統合機能までを考慮に入れた行動の理解というのはほとんどの場合軽視されている。これはきっと苦しいはず、あるいは楽しいはず、という簡単な情動の背景にある認知能力と情報統合の仕組みは、実は私たち人間のもっているものや理解できるものを超えているのかもしれない。そのような壁を越えるには、人間的先入観を排除し、しっかりとした行動科学による研究が必要となるのであろう。私自身、一行動研究者として本書に書かれたメッセージを重く受け止め、自分(あるいは人間)中心になりがちな動物の理解を、しっかりと動物本位の行動解析が行えるよう、心がけたいと感じた。そのような意味では大変面白い本であり、ぜひ動物に携わる人たちに推薦したい一書である。(東京大学・菊水健史)

「Owner-companion dog interactions: Relationships between demographic variables, potentially problematic behaviours, training engagement and shared activities」

PC Bennett and VI Rohlf Appl. Anim. Behav Sci. 2007 102:65-84

多くの伴侶犬は私たちの社会で特別な特権を与えられ、犬が必要なものを与えるためにはどんなことでもするとさえいえるような家族と密着した生活を営んでいる。一方では、問題行動のせいで、食べ物も満足に与えられることなく捨てられたり殺されたりする動物もいる。この研究の目的は伴侶犬の飼い主の日常調査から潜在する問題行動の頻度を明らかにし、これらの問題行動に訓練状況、犬や飼い主のシグナルメント、係わり合いなど種々の要因が関与しているかを明らかにすることであった。調査対象は郵便アンケートまたはインターネットアンケートの回答者で平均 35.8 歳の計 413 人であった。犬は雄 46.2% 雌 53.3%、平均年齢 5.1 歳（4 歳以下が 1/2 を占めていた）、小型犬 20.2% 中型犬 48.6% 大型犬 33.9% であった。犬達の 5 割がブリーダーから購入されていた。飼い主が行う係わり合いとしての「共有行動」で頻度が高かったのは抱きしめる、一緒に座って話をする、遊ぶ、おやつを与える、キスをするなどであった。問題行動は他のレポートに比較し発生が低かったが、不服従、非友好的／攻撃、神経質、不安／破壊行動、易興奮性の 5 つに統計学的に分類された。それぞれの問題には有意な関連を持つ要素が存在していた（例 不服従の犬に関連する要素は、家族の人数が多い、他の犬と触れ合う経験が少ない、他人が世話をしている、雑種、小型犬など）。また問題行動間でも不服従の犬は非友好的／攻撃、神経質、不安／破壊行動と、非友好的／攻撃は神経質と、神経質は不安／破壊行動、易興奮性と、不安／破壊行動は易興奮性とそれぞれ関連していた。フォーマルな訓練クラスを含め、訓練を受けた経験は問題行動を少なくし、飼い主と犬との共有行動を増やすことに役立っていた。犬の友好性は共有行動をたくさん持つ犬で高かった。これらのことから、犬を訓練し共有行動を展開し社会性を上げることは飼い主と犬の両者にとって益をもたらすことが示された。

<会員からの投稿>

「動物とメディア」

入交眞巳

最近メディアと動物について、あるいはメディアとコンパニオンアニマルそしてその飼い主について考える機会が多くなりました。この度メディアについて考えるようになった詳細はそのうち詳しくお話しするときもあるかもしれませんが、今回は、北アメリカで大学院生をしていたときに取った授業で「なるほど！」と思ったことを書きたいと思います。

日本でもアメリカでも、犬は人間のベストフレンド、と言う認識が強いのは皆様もよくご存知でしょう。それに対して、猫は、自由気ままな動物で、犬で言うような「ベストフレンド」とは少し違うニュアンスを持つと一般的には思われている

ます（もちろんこれは、私たち人間が勝手に言っているイメージの話で、行動学的には多少違ってきます）。日本では、この犬と猫のニュアンスの違いは少し小さいような気がします。アメリカでは、犬を飼う意味合いと猫を飼う意味合いはずいぶん違うようです。たとえば、テレビコマーシャルや映画を観ていて、「仲のいい家族」、「理想的な家族」と言うメッセージを伝えたい場合、必ずと言っていいほど、犬が家族の一員として登場します。コマーシャルを観ていて、犬は、トイレトペーパーなど、ふかふか、ほわほわ、と言う意味を持たせたい時、「家庭」という意味を持たせたいときによく出てきますが、猫は、猫トイレのコマーシャルか、猫のご飯のコマーシャルにしか出てきません。「猫」と「仲良し家族」と言うイメージはつながらないようです。

北アメリカの大統領の政治的戦略の一つで、大統領の「プライベート」は家族思いのやさしい人、というイメージを持たせるために、クリントン大統領は、Buddy と言う犬とテレビに出てきましたし、現在のブッシュ大統領も、飼い犬とテレビに出てきます。犬とメディアに出ることは、政治的戦略の一つになるのです。国民は犬と一緒に大統領を見て、家族思いの心優しい(動物を愛する人に悪人はいない)、大統領をイメージします。それに対し、猫と一緒にテレビに出てくる大統領はいません。強いて言えば、ルーズベルト大統領が、個人のために書かせた自画像に飼い猫と一緒にいることでしょうか。でもこれは政治的戦略的イメージアップのための絵ではなく、彼個人のものなので、政治的メッセージを持たせるために猫は使われることはありません。

日本はどうなのでしょう。よく考えると、動物種により、文化的イメージと言うものは違い、メディアはそれを熟知して私たちにもメッセージを伝えているようです。

*入交先生のお名前は、メーリングリストでお名前をご存知かと思えます。彼女はパデュー大学 Andrew Luescher 先生の指導下で PhD を取得され、その後、ジョージア大学 Sharon Crowell-Davis 先生の指導下で行動治療科のレジデントを修了されて、昨年末日本に帰国されました。今春から、北里大学にて教員としての生活を始められます。今後の会の発展に大きな働きをなされることを期待し、今回コアメンバーに森先生の推挙で加わっていただきましたのであわせてご紹介いたします。

「今、こんなことに、はまっています！」

白井 玲子

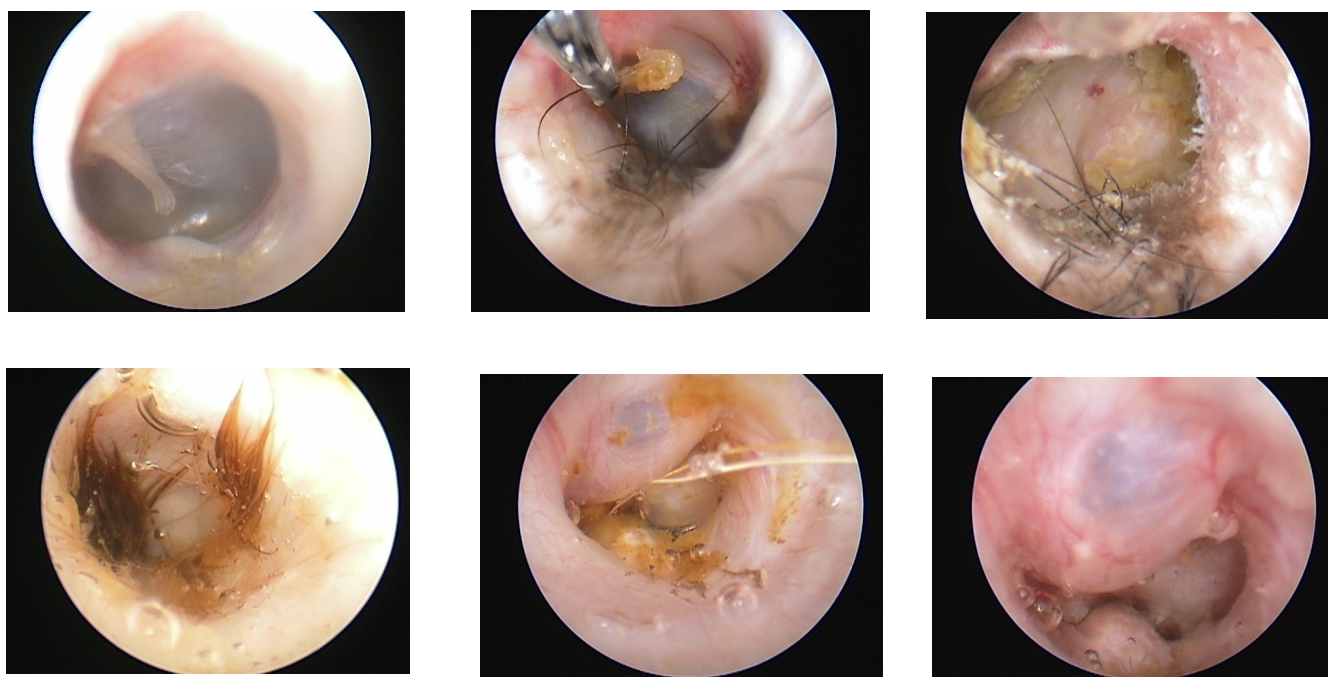
アメリカ獣医師大会(AVMA2006)耳内視鏡の実習に参加して以来、耳にコリマクツテいます。というのも、今春、耳の扁平上皮癌を患っているキンちゃん(雑種15歳)との出会いがあり、悲しい思いをしたからです。以来、毎日、耳内視鏡です。

先日、数年前まで、カウンセリングをしていたミツオ(仮名)君の飼い主から久々に診療依頼がありました。近頃、とても過敏で些細なことに苛立ち、家族を咬むとのこと。近医で身体的ケアは受けているとのこと。家族間の出来事や引越しなどが重なり、精神的なことが原因ではないかと、車で2時間かけて来院しまし

た。

結論をいうと、中耳炎。痛かったのです。たかが耳というなかれ。歯に物がはさまっても不快感はぬぐえません。まして耳。さぞや痛かったことでしょう。問題行動を扱う場合、身体的病気を精査すべきことは百も承知。しかし、見落としてしまうことも多々あります。とくに、飼い主からそれらしい情報を提示されると、思い込みで関連付けてしまうことがあります。鼓膜が破れていても、飼い主はもとより、獣医師である私すら外見からはまったく気がつきません。なんと前庭障害があっても片方だけだと・・・気づきません。耳介は正常にみえても、鼓膜が障害されているものが多数います。耳内視鏡は優れものです。

- 写真上左 正常な鼓膜(猫)
- 写真上中 鼓膜の前面から把持鉗子で耳垢を摘出中(犬)
- 写真上右 中耳炎の耳。鼓室を洗浄中(犬)・・・耳内視鏡がなければ ope 適用
- 写真下左 鼓膜に多数の毛が付着(犬)
- 写真下中 外耳炎、治療前
- 写真下右 外耳炎、治療後・・・鼓膜は変形



編集後記 レターの発行が遅れました。ごめんなさい。コアメンバー以外からの投稿がゼロという残念な事態は何時になったら解消するのでしょうか(^)。一日も早くその号がくることを願っています。HPが新しくなったことによりやく気付かれた会員のみなさん、1号と合わせて本レターをもう一度お読みいただき研究会の活動を積極化させることにご協力くださいね。

(酪農学園大学 内田佳子)